

つぶやきシステムを利用したミニ移動大学の実践

A practical report of Mini Nomadic University with Smart Voice messaging

岡田政則 (Masanori OKADA)[†] 内平直志 (Naoshi UCHIHIRA)^{††}

平石邦彦 (Kunihiko HIRAISHI)^{††} 國藤進 (Susumu KUNIFUJI)^{††}

[†] 金沢学院大学

Kanazawa Gakuin University

^{††} 北陸先端科学技術大学院大学

Jaist

あらまし: 8月上旬に白山市鶴来地区にてミニ移動大学が行われる。これは住民、行政、Jaistが共同で行う調査活動である。フィールドワークでは気づき収集として写真を撮り、それを写真KJ法により共有して構造化することで、町おこし提案につなげる。今回はつぶやきシステムを利用し、今までの画像、従来のメモに加えテキスト化した音声メモをメンターとのやり取りを加えて効果的に気づきを収集する。この取り組みはアクティブラーニングとして地域連携の取り組みをスマートフォンを利用した情報共有システムでバックアップするかたちになる。本稿ではその実践計画であり、全国大会にて実践分析結果を報告する。

キーワード アクティブラーニング, 地域連携, 問題解決

1. はじめに

看護や介護の現場ではその場で気づいたことを作業後にまとめて報告すべきこと多くあるが、現場では記録しにくい。そしてその記録は他のスタッフと共有し申し送り事項ともなる。この現場での記録を、共有・再利用することで業務改善を目的としたシステムがつぶやきシステムである。

また教育の現場では今通常の講義形式の学びだけでなく学修者の能動的な学習形式としてアクティブラーニング(以下AL)が導入されている。学びの構造の自由度が高く活動の範囲が比較的広いALにプロジェクト学習や創生学習と言われるフィールドワーク(以下FW)を伴ったものがある。これは現場での気づきが学習成果をまとめる際に必要になるが、この気づきは先の看護や介護現場のそれとは性格が異なる。FWでは参加者の感度を最大にして観察や取材をせねばならないがやはり記録しにくい現場であることが多い。

そこで本稿ではつぶやきシステムを利用した、ALとしてミニ移動大学において気づきの効果を報告する。

2. つぶやきシステム

つぶやきシステム[3]は、医療・介護に代表される「状況適用・行動型サービス」の質と効率を向上するため

の支援システムである。そしてそれは医療・介護関係者間の記録や連絡などのコミュニケーション支援とその蓄積されたデータを利用してサービスを可視化し評価可能である。

2.1 システム概要

つぶやきシステム(図1)とは現場で、生音声(つぶやき)を記録し、それにキーワード、位置、職員ID、時刻そして業務にある種のタグを自動的に付けて、データベースに記録し、配信するシステムである。生音声の収集はスマートフォンで行っている。大凡システムはつぶやき時空間コミュニケーションシステムとサービス空間可視化・評価システムに分かれる。

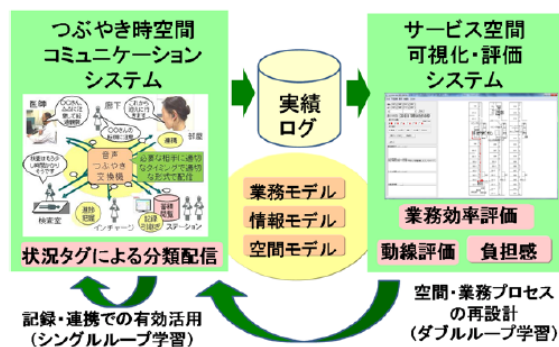


図1 つぶやきシステム

2.2 つぶやきシステム適用例

2013年5月に介護施設Sで実施した試行評価では、音声つぶやきの状況タグで連携用つぶやきと記録用つぶやきを分類し、配信制御を行った。5日間で約650の音声つぶやきがあり、そのうち500弱が連携に関するつぶやきであった。この音声つぶやきをいくつかのパターンに分類し、つぶやきを聞いた側のケアスタッフの行動が自律的にどのように変わり、ケア品質向上に有効かをインタビューした。その結果、つぶやきのパターンごとに(1)要介護者の状態変化に即応したケア(2)要介護者のリスク削減(転倒防止, 所在確認)(3)不穏状況への適切な対応(4)事前準備による落ち着いた対応(5)ケアスタッフのリソース状況に適応した対応, などの品質向上に結びつく事例を確認できた。

3. 地域活性化ミニ移動大学

3.1 ミニ移動大学

ミニ移動大学とは2008年度から著者の一人國藤[2], [5]を中心にある地域の可能性と問題点を解決する取り組みである。参加者は指導教員, 協力者と北陸先端科学技術大学院大学の学生そしてその地域の住民(と自治体職員)である。4日間の日程でFWとワークショップ(以下WS)を取り混ぜ、写真KJ法をにてデータの収集と整理を行う。

学生はALとして参加する。つまり課題発見, アイデア生成, チームワーク, プレゼンテーション, ディベートの経験とその能力の養成が期待される。大学・地域から見ると地域連携の取り組みであり, さらに地域住民からは若者またはよそ者の目から見た地域の問題点と魅力の発見の機会である。

3.2 2015年度の取り組み

例えば2015年度のミニ移動大学は石川県能美市で8月20日から23日に実施された。参加者は指導スタッフが12名, 受講生(修士学生)が12名そして地域住民の方である。4チームに分かれてそれぞれ担当地区をFWし, WSにて問題意識の発掘と共有を行った。

4. つぶやきシステムを利用したミニ移動大学

4.1 アクティブラーニング

[4]では「アクティブラーニング」とは「教員による一方向的な講義形式の教育とは異なり, 学修者の能動的な学修への参加を取り入れた教授・学習法の総称。」とある。この学修者^(注1)とは学問を修める者であり大学生^(注2)を対象としていた。本研究では学修者/生徒の

(注1): 学修と学習を同じとする解釈もある

(注2): 平成26(2014)年11月の中教審諮問では初等中等教育に対称

「能動的な」態度に着目する。[1]では教育環境における経験の移動を論じている。これは初対面の段階から受動的であるがデータ収集の段階へ, そして段々と能動的になって幅広くデータ収集に加え地域の人から話を聞くようになる。最終的には考えをまとめて提言できる段階になる。

本研究では地域の人と積極的に対話できることとつぶやきの量が一つの指標になると考える。

4.2 ミニ移動大学でのつぶやきシステム

ミニ移動大学では4チームがそれぞれの担当地域/テーマで2回のFWとその間のWSにて情報共有を行ってきた。今回つぶやきシステムを利用することでFWの最中にメンターとリアルタイムに情報を共有することと, 4日間の計画が終了後にFWの行動を解析することが可能となっている。

4.3 ミニ移動大学でのつぶやきシステムの効果仮説

ミニ移動大学でつぶやきシステム利用した理由は以下の通り。フィールドワークでの気づき収集は移動するという適度な刺激で, 気づきが促進されると予想される。つぶやきシステムを利用することでその気づきを記録し量とともに内容の解析を行う。

5. まとめと考察

音声つぶやきの効用は, (1)リアルタイム連携支援(2)記録支援(3)業務改善支援(振り返り分析)の3つがある。アクティブラーニングとしてのミニ移動大学に利用した本研究では(2)が主な目的である。実際にどの程度の記録支援ができて, その質的な効果を発表する予定である。

参考文献

- [1] 岡田政則, 中崎崇志. ノートテイキングの継続性とその意味づけ. 教育システム情報学会第39回全国大会論文集, Vol. 39, , 2014.
- [2] 川喜田二郎記念編集委員会. 融然の探検. 清水弘文堂書房, 2012.
- [3] 内平直志他. 音声つぶやきによる医療・介護サービス空間のコミュニケーション. 第25回人工知能学会全国大会, Vol. 1J1-OS9-4, , 6 2011.
- [4] 文部科学省. 質的転換答申用語集. 2012.
- [5] 國藤進, 他. ミニ移動大学:三つの効能. 日本創造学会 第38回全国大会論文集, Vol. 38, pp. 22-25, 2016.

が広がる